



◎2010年に開校した小中高12年間一貫教育のための新しい学校。21世紀の世界を切り拓く豊かな「考動力」の育成を目指す。全員参加のシンガポール研修旅行や海外交流校との合同授業など、国際理解教育を推進。コンピューター室やマルチメディア教室などを活用したICT教育にも力を入れる。

設立

2010(平成22)年

形態

全日制/安全科学科/共学

生徒数

1学年約130人

12年度入試合格実績(現浪計)

なし(1期生の卒業は2013年3月)

住所

〒569-1098
大阪府高槻市白梅町7-1

電話

072-684-4327

Web Site

<http://www.kansai-u.ac.jp/senior/>

大阪府・私立
関西大学高等部

探究活動

探究能力と学力の 両面を追究する 新設校の挑戦

変革のステップ

背景

◎関西大を母体に、小中高12年間一貫教育を行うために開校。探究能力と教科学力の育成を目標に掲げる

STEP 1

実践

◎プロジェクト科目を軸とした探究活動、7時間授業、教師全員参加の模試分析会による学力向上策を推進

STEP 2

成果

◎探究活動を通して自ら考えて行動する生徒、高い志望を目指して頑張る生徒が現れ始めている

STEP 3

人材も設備も全て
ゼロからのスタート

関西大が小中高12年間一貫教育のための学校を開校したのは、今から3年前のこと。併設の中学・高校は既にあったが、小学校からの一貫教育は初めての試みであった。高等部は、普通科ではなく、「安全科学科」という専門科を立ち上げた。米津俊司校長は次のように語る。

「一貫教育を通して、急速に進む国際化や情報化、科学技術の発展に対応できる力を育むことが、本校に課せられた使命です。難関大進学に必要な高い学力と併せて、自ら課題を見付け解決していく『探究能力』を育むことが重要だと考えています。安全科学科としては、教科の枠を越えて探究活動を行い、大学で学ぶ基礎となる探究能力を身に付けることが狙いでした」

特徴は、私立大の付属校でありながら、難関国公立大に進学できる力の育成も目標として掲げていることだ。入試広報部長の近藤順之介先生はこう説明する。

「最終的な進学先がどこであっても、学校全体のレベルを上げようと思ったら、多くの生徒が成績上位となる必要があります。難関大を目指す生徒が増えれば、内部進学生も刺激を受けて、結果的に関西大に進む生徒の学力も底上げ出来ると考えています」

教員の確保、校舎の建設などは全てゼロから始めた。一般的に、付属校が設置される時は、他の併設校から教師が赴任して設立準備から運営までを担うことが多い。しかし、同校が取った方法は違った。「全く新しい学校をつくる」という方針の下、併設校の教師は参加せず、全国の学校から多様なキャリア、ノウハウを持った教師がスカウトされた。教科指導はもちろん、入試や進路、教務、探究活動、教育行政などの専門知識を持つ教師や職員が集まり、学校を一からつくり上げていったのである。小中高、そ



関西大学高等部校長
米津俊司 よねつ・しゅんじ
教職歴41年。同校に赴任して5年目。「21世紀の世界を切り拓く『考動力』豊かな人間を育てたい」



関西大学高等部教頭
鶴飼昌男 うかい・まさお
教職歴27年。同校に赴任して5年目。「誠実に生徒に接し、授業で生徒を鍛えたい」



関西大学高等部
辻勝也 つじ・かつや
教職歴28年。同校に赴任して4年目。教務主任。「我が子を通わせたいと思うような学校づくりをしていきたい」



関西大学高等部
近藤順之介 こんどう・じゅんのすけ
教職歴28年。同校に赴任して4年目。入試広報部長。「経験を事前に結果を予測できる人材を育てたい」

して大学までが入る13階建ての校舎が竣工し、10年4月、開校を迎えた。

探究活動の狙いは「THINK×ACT」

同校の教育課程で中心を成すのは、1年生から3年生5月まで行う「プロジェクト科目」(計7単位)だ。生徒が自ら課題を設定し、調べ学習や実験などをし、最終的に卒業論文に結実させる。教務主任の辻勝也先生は次のように語る。

「関西大は、自律的かつ積極的に行動する『考動力』の育成を目標として『THINK×ACT(シンク・バイ・アクト)』というキャッチフレーズを掲げています。自ら考えて動くことが出来れば、危険も事前に回避できますし、人の気持ちを考えて行動すれば、よりよい人間関係が築けるはずです。本校の探究活動の狙いも、まさに『THINK×ACT』の一言に集約できると思います」

1年生前期では、探究活動を行うためのスキルを身に付ける。パソコンを使ったデータ処理、プレゼンテーションやディベートの方法、ブレインストーミングやKJ法などの思考法、文章の要約や引用のルールといった論文の書き方など、幅広く学ぶ。

1年生後期からはグループ研究が始まる。自然科学、社会科学、国際理解、総合の4系列に

分かれ、それぞれ少人数の「ゼミ」を組んで共同研究を進め、1年生の最後にプレゼンテーションソフトを使い発表する。

ゼミは、生徒が個々に決めたテーマの内容が近い者同士を集め、4〜6つのグループをつくる。例えば、自然科学系列なら、環境問題をテーマにした6人、化学に特化した4人がそれぞれ1つのゼミとなり、研究から発表までを行う。

2年生では、1年生の成果を踏まえて更に内容を掘り下げたり、軌道修正したりしながら、引き続き研究を進める。研究方法も、専門性の高い文献を調べたり、関西大の教授に話を聞いたり、よりレベルの高い手法を用いる。そして、後期に中間発表を行い、生徒一人ひとりが1万2000字の卒業論文に仕上げる。

3年生では、5月の卒業研究発表会に向けてプレゼンテーションソフトで研究内容をまとめる。クラスごとに予選会を開いて優秀作品を選び、大学教員を審査員とした本大会を開く。

探究活動で視野を広げ 志望学部へのミスマッチを防ぐ

探究活動では、教師はあくまでアドバイザーに徹する。テーマ設定から発表までを生徒自らがを行い、成果物に教師が手を入れるようなことはしない。また、通常の教科学習に支障が出ないよう、探究活動は授業時間内に完結するよう

に指導している。生徒には、授業内で終わらせるための集中力が求められると共に、通常の学習との気持ちの切り替えの仕方学ぶ。

研究テーマは、基本的に1年生で決めたテーマを最後まで研究し通すよう、指導する。研究の不備や関心の変化に応じて、多少変更することはあるが、1年生で決めたテーマを発展させる形で2年生、3年生へとつなげていく。鵜飼昌男教頭は次のように述べる。

「1年生から同じテーマを追究していると、自分の興味・関心だけに偏り、かえって視野が狭くなると思われるかもしれませんが、実際はその逆です。1年生の発表が終わった時点で、本当にこのテーマで続けていくのかを生徒に投げ掛けます。また、テーマが矮小にならないように、教師が隣接分野に目を向けさせるなどのアドバイスをして、自分で決めたテーマを土台として視野を広げていく中で、いろいろな学問や社会事象との関連が見えてくるように仕向けています」

研究発表会では、大学教員から厳しい質問が投げ掛けられることもある。12年5月に行った1期生による発表会では、初めての大きな舞台を終えた安心感から、泣き出す生徒もいたという。予想以上の研究レベルの高さに、大学教員もつい本気になって厳しい意見を投げ掛けたのだ。

テーマ設定や論文作成など、生徒にとっては試行錯誤の連続となるが、この経験は大学・学

部の選択に生きると、教師は確信している。

「卒業論文を仕上げた時点で、自分はこの分野に向いていないと分かれば、学部選びを軌道修正できます。すなわち、大学進学後の学部ミスマッチを未然に防ぐことが出来るわけです。学力や偏差値だけの進路指導、根拠の不明確な興味・関心に偏った学部選びではない、確信を持った進路選択を後押し出来るよう、進路指導との連携を強化していきたいと考えています」(鵜飼教頭)

中高の全ての教師が参加する 模試分析会

探究能力の育成と並ぶ2つめの柱が、国公立大学合格を見据えた教科学力の育成だ。

まず留意するのが、学習量の確保だ。毎日7時間の授業や、生活学習計画表による自宅学習の促進に加え、夏・冬の長期休業中には3教科の補習を行う。教科学力は大学入試だけではなく、探究能力を高めるためにも必要だと、辻先生は指摘する。

「本校では、1年で学習のスタイルを固めたいので、あえて詰め込みをします。詰め込みという悪いことのように捉える向きもありますが、1年生では徹底的に知識を詰め込み、2、3年生でそれを運用・応用していく力を付けていけば、探究活動にも広がりが生

まれ、結果的に生徒の探究能力を伸ばすことにもつながります。1年生で基礎・基本の全てを習得できるわけではありませんが、13年度以降は中高が接続することもあり、一貫校の利点を生かして、知識の運用や応用に時間を掛けられるようにしていきたいと考えています」(辻先生)

全ての模試結果の分析を、中等部・高等部の教師全員で行っているのも、同校の特徴だ。高等部で実施している進研模試とスタディーサポート、および中等部の学力推移調査について、結果が出る度に中高の教師全員が集まり、生徒の学力状況や課題を共有する。

停滞している教科があれば、皆で原因を探り、その結果を基に教科団で学力向上策を検討し、方針を提示する。成績が良くない生徒に対しても同様に、学力の伸び悩みの原因を探り、担任が面談で助言できるよう、皆で知恵を出し合う。中高の教師が一堂に会して情報を共有するのは、将来的に6年間一貫で学年団を持ち上げる体制をつくるための布石だと、米津校長は説明する。

「現在、教師の受け持ちは、過去の勤務経験に従って、中学校経験者は中等部、高校経験者は高等部としています。中学校の先生は大学受験についての知識がありませんし、高校の先生は、思春期特有の課題を実感できません。いきなり異校種を受け持つともうまく

いかなので、模試の分析会を通じて、6年間の生徒の様子を見通すことが出来るようになるかと考えました。大学入試はどうなっていくのか、中等部の成績は高等部の教師から見ても満足いくものなのかといったさまざまな視点で議論をしながら、課題意識を共有することを大切にしています」(米津校長)

第2クールの課題は 中等部や大学との連携

開校から3年目を迎え、13年3月には高等学校から入学した1期生が卒業する。出来るだけ多くの生徒が国公立大に合格するように支援することが、当面の目標となる。

現在までの成果としては、まず学力向上が挙げられる。3年生の入学時の学力は、新設校ということもあり、他の併設校に比べて低かったが、3教科はほぼ同じ水準まで上がった。また、3年生の中には、他の生徒と違う課題を教師に求めてくるなど、自ら自分の弱点を見付けて克服しようとする姿勢も見られるようになった。関西大への内部進学だけが進路ではないという意識を持ち、更にも上を目指す生徒が現れたのである。

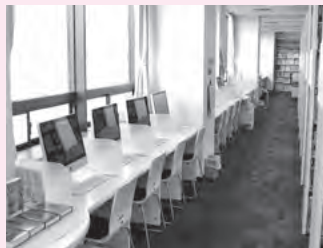
探究活動の成果と考えられる生徒の変容も見られる。生徒同士で何かを考える時、ブレインストーミングなど、プロジェクト科目で学んだ

方法を使って、解決策を模索する姿が見られるようになった。シンガポールへの海外研修旅行の班別活動で日本大使館を訪れた生徒は、「なぜシンガポールは多宗教なのに治安が保たれているのか」といった鋭い質問を投げ掛けて、大使館の職員をうならせる場面もあったという。新しいことをどんどん吸収しようとする生徒の意欲の高まりを、教師はひしひしと感じている。

13年4月には、いよいよ中等部で3年間を過ごした生徒が高校1年生となる。今後の課題の1つは、中等部や大学との連携を更に進めていくことにあるという。

ICTの活用

探究能力と教科学力の育成という大きな目標を支えるツールとして、同校ではICTの活用にも力を入れている。図書室やマルチメディア教室には多くのパソコンが配備されており、いつでも生徒が自由に使えるようになっている。探究活動の調べ学習や論文作成の時期には、図書室やマルチメディア教室がパソコンを使う生徒であふれるという。また、中等部ではインターネット電話を使って海外の提携校の生徒と交流したり、海外留学をしている同級生と情報交換をしたりしている。

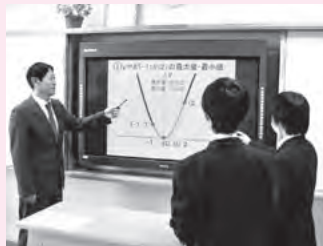


パソコンが配備された図書室

各教室のホワイトボードの裏には、パソコンに接続された電子黒板が常備されており、いつでもインターネットやデジタル教材にアクセスできる。変化のあることを説明する機会が多い数学や物理、化学などでは、その変化をアニメーション機能や動画で見せることにより、また、資料の提示が多い生物や日本史、世界史などでは、インターネットから得られる豊富なコンテンツにより、教科に対する理解が深まるという。



マルチメディア教室



電子黒板での指導は日常的に行っている

「開校から3年間の第1クールで、ひとまず本校の指導スタイルが形づくられました。中等部からの内部進学学生を迎える第2クール以降は、探究活動を中心に中等部と重複している活動を整理するなど、主に1年生の活動の質を更に向上させようと考えています。また、付属校としての立場を生かして、今以上に関西大との連携を深めていきたいと考えています。内部進学を目指す生徒の学びのモチベーションを高めることで、更に充実した活動が展開されることを期待しています」(鶏飼教頭)